

所属・資格 英文学科・教授

申請者氏名 保坂 道雄

研究課題		言語変化と言語進化
報告の概要	研究目的 および 研究概要	ここ数年、言語進化の研究は新たな展開を見せている。特に、生物言語学という新領域が生まれたことにより、生物学、脳科学、人類学、考古学等との学際的研究が一段と進み、国内はもとより（日本進化学会等）、国際的にも様々な学会（EVOLANG 等）が開催されている。しかしながら、言葉の変化を主要な対象としてきた歴史言語学とは、その研究姿勢に大きな隔たりが存在する。本研究では、言語変化もまた、言語進化の研究の一部として成立しうることを、動的な言語モデルを想定して、提案する。なお、2019年度の具体的目標としては、BE動詞を中心とした構文（存在構文、コピュラ構文、受動構文、完了構文）において、BE動詞が如何にして文法化してきたかについて、言語進化の観点から検討するものである。本年度は特に、BE完了形における Auxiliary Selection の問題について、多様な言語コーパスを資料に、その変化について考察を深める予定である。
	研究の 結果	本年度の研究では、英語の完了構文（BE完了形及びHAVE完了形）の通時的発達をテーマとして取り上げ、その機能構造の発達に関して記述的及び理論的考察を行った。なお、その成果は、2019年12月に開催された日本人間行動進化学会及び日本歴史言語学会、2020年1月に別府で開催された国際学会 ISALR にて発表を行った。また、こうした機能構造の変化を言語進化の観点から捉え直す作業も同時に進めており、2020年3月にハワイ大学で開催された国際学会 HICELLS にて機能範疇の創発現象についてその研究成果を発表した。
	研究の 考察 ・ 反省	今後、上記の研究をより発展させるためには、提案した機能的構造の進化を証明するためのより多彩な議論が必要となる。特に、今年度は、完了形の発達に関して、変化を駆動する進化的要因（自然選択と機会的浮動）について大規模コーパス（COHA, EEBO, Google Books 等）を用いて統計的分析を行い、文化進化研究の観点から新たな知見（自然選択の優位性）を得るに至った。今後は、対象とする言語現象を広げ、更なる調査分析を行う予定である。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p><研究発表> 奥田慎平, <u>保坂道雄</u>, 笹原和俊 (2019) 「英語の完了構文の進化ダイナミクス：複数の大規模コーパスを用いた検討」, 日本人間行動進化学会 第12回大会, 明治学院大学, 2019年12月8日 奥田慎平, <u>保坂道雄</u>, 笹原和俊 (2019) 「ことばの変化と進化—文化進化の事例研究—」 日本歴史言語学会 2019 年大会, 広島大学, 2019年12月14日 奥田慎平, <u>保坂道雄</u>, 笹原和俊 (2020) "Evolutionary forces in the development of the English perfect construction", 25th International Symposium on Artificial Life and Robotics, B-Con Plaza, 別府, 2020年1月24日 保坂道雄 (2020) "The Emergence of Functional Projections in the History of English" Hawaii International Conference on English Language and Literature Studies (HICELLS) 2020, University of Hawaii, 2020年3月13日 保坂道雄 (2020) "Emergence of Linguistic Structure", 新学術領域「共創言語進化」第4回 領域全体会議 ポスターセッション, バーチャル会議, 2020年3月20日</p>